

# “NIDS NEWS”



防衛研究所企画部企画調整課 (03-3713-5912)

..... 2015年10月の主な出来事 .....

## 《 新所長の着任 》



10月1日、防衛研究所長に鈴木良之・前防衛監察本部副監察監が着任しました。鈴木所長は、東京都出身、昭和57年中央大学法学部卒業後に防衛庁（当時）へ入庁。契約本部輸入課長、技術研究本部技術企画部長、北関東防衛局長、地方協力局次長、防衛大臣官房審議官等の要職を歴任しています。

着任挨拶において鈴木所長は、職員に対する要望として、第一に仕事上の問題点を意見交換・情報連絡を通じて共有し解決していく

文化を大切にし、風通しのよい職場とすること、第二に防衛省・自衛隊の最高の研究教育機関として国民の期待に応え、業務を円滑に進めるためにもコンプライアンスの徹底を心がけてほしいと述べました。

齊藤敏夫前所長は、同日付で退職しました。

## 《 赤十字国際委員会（ICRC）セミナーの開催 》

10月9日、防衛研究所にて、赤十字国際委員会（ICRC）国際平和協力セミナー「現代の軍事作戦と人道」が開催されました。同セミナーには、リン・シュレーダーICRC駐日代表、ウィリアム・ブースビー退役英国空軍准将・元英国空軍法務部副部長、カービー・アボット ICRCクアラルンプール地域代表部軍事顧問、柴崎大輔 ICRC駐日事務所政策担当官が参加されました。日本側からは、防衛省・自衛隊の専門家等、約40名が参加しま



した。

同セミナーには、3つのセッションが設けられ、第1セッションは「現代の航空攻撃—TSTを中心に」というテーマで、清水防衛研究所軍事戦略研究室長の発表とアボット顧問によるコメントが行われました。続いて、第2セッションは「ターゲティングの人道原則」というテーマで、ブースビー退役准将の発表と河野桂子理論研究部主任研究官によるコメントが行われました。そして第3セッションでは総括議論として、セミナー参加者によるパネル・ディスカッション及び会場参加者を交えた質疑応答が行われました。

### 《 日韓戦史研究交流の実施 》



10月14日、防衛研究所内で韓国国防部軍史編纂研究所との日韓戦史研究交流が実施されました。同交流は、平成12年より日韓交互に毎年開催しています。第16回目となった今回は、韓国側からは同戦争史部の趙成勲部長及び軍事史部の李相昊主任研究員、馬政春史料専門員及び盧永九韓国国防大学教授の4名が発表者及びコメンテーターとして参加しました。

研究会では、日本側から戦史研究センター

大塚主任研究官が「中国大陸から日本本土空襲に対する日本陸軍の対航空作戦」、同センター千々和主任研究官が「戦後日本の内閣安全保障機構史」をテーマに発表し、韓国側から趙部長が「韓国戦争停戦協定で漢江河口の共同水域の設定が持つ意味の再考察」、李研究員が「韓国及び日本における米極東軍司令部の組織と活動」をテーマに発表を行いました。研究発表後の全体討論では、日韓それぞれの視点から興味深いコメントや質問が数多くなされました。



### 《 香山フォーラムへの参加 》

大西防衛研究所副所長以下3名は、10月16日から18日までの間、中国北京で開催された第6回香山フォーラムに参加しました。同会議は、中国軍事科学学会及び中国国際戦略学会が主催する国際会議で、昨年からは政府関係者も含めたトラック1.5の枠組みで開催されています。全体テーマを「アジア太平洋地域における安全保障協力——



現実と未来像（SECURITY COOPERATION IN THE ASIA-PACIFIC: REALITIES AND VISIONS）として、域内の安全保障協力、海洋安全保障、対テロ協力につき、全体会合（国防大臣等が出席）と分科会（専門家会合）で発表・質疑が行われました。

### 《 フランス軍事学校戦略研究所長の来訪 》



10月19日、フレデリック・シャリヨン フランス軍事学校戦略研究所（IRSEM）長が来訪され、鈴木所長との懇談及び研究会を実施しました。懇談においては、鈴木所長からはシャリヨン所長が昨年12月に続いて今回は2度目の訪問となることに謝意を述べ、防衛分野でのアカデミックな交流は大変意義がある旨述べました。シャリヨン所長からは、日仏は戦略的な価値を共有しており、日仏の両国は、地理的には離れているものの、関係を一層深化させる余地が

あるとの考えを述べられました。

研究会では、「海洋・中国問題」、「アフリカ問題」、「欧州・ロシア問題」の3つのセッションを設け、双方の研究者による発表を行いました。発表及びそれに続く討議では、南シナ海における中国の活動の現状と国際社会がとりうる方策、アフリカ地域に対するフランスの外交・安全保障政策の歴史的変遷、ウクライナ危機後のロシアの外交政策、中露関係、アジアと欧州が直面する安全保障課題の類似性など幅広い課題について、日仏それぞれの視点から活発な議論が行われました。

### 《 第63期一般課程 》

10月は、先月に引き続き「戦略理論」、「法と安全保障」、「経済と安全保障」、「米国の安全保障政策」、「東アジアの安全保障Ⅰ」、「戦争史原論」、「冷戦と日本の安全保障政策」の各講座及び7個の各セミナーを実施しました。さらに、白石豊福島大学人間発達文化学類教授による「統率力：マネジメント」と題した特別講義を行いました。

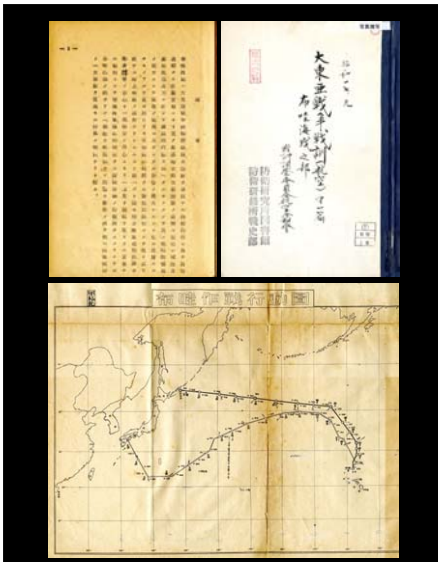
また、西部方面地区に所在する陸上、海上及び航空自衛隊の部隊を研修し、現状について認識を深めるとともに、史跡研修を通じて留学生に対して日本の文化、歴史を認識させることを目的として7日から9日の3日間、西方現地研修を実施しました。

西方現地研修初日は、航空自衛隊西部航空方面隊司令部において、副司令官講話及び西部航空方面隊の概況説明を受けました。翌日は、陸上自衛隊西部方面普通科連隊の概況説明及び泳法訓練の見学を通じて、島嶼防衛を主たる任務とした部隊の現状認識を深めることができました。その後、海上自衛隊佐世保地方総監部において、総監講話及び概況説明を受けました。最終日は、陸上自衛隊西部方面総監部において、総監講話及び概況説明を受けた後、史跡研修として熊本城を訪問しました。

.....「史料紹介コーナー」.....

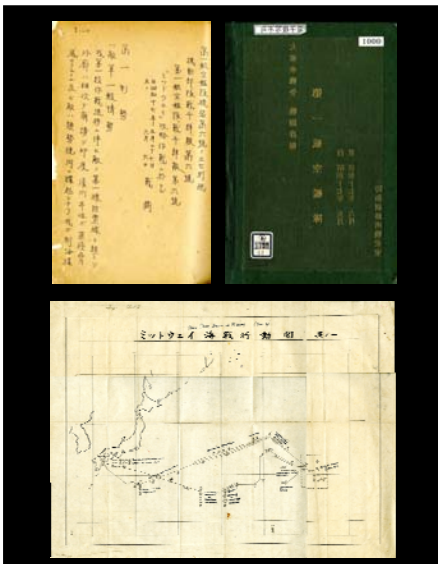
平成27年度も、各都道府県出身の陸海軍将官の中から毎号一人を取り上げて、戦史研究センター史料室が所蔵するその人物などに関連する史料を紹介しています。

《 <sup>なぐも</sup>南雲 <sup>ちゆういち</sup>忠一 1887~1944年 《  
—山形県出身の海軍大将—



**大東亜戦争戦訓（航空）第一篇**（登録番号：①中央-戦訓-15）

南雲忠一大将は、明治41年11月、海軍兵学校（36期）を卒業後、海軍大学学校校長などの要職を務めた後、昭和16年12月8日のハワイ作戦で、第1航空艦隊司令長官（当時中将）として空母機動部隊を指揮します。この史料は、機動部隊戦闘詳報を基に作成された「大東亜戦争戦訓（航空）第一篇（布哇海戦ノ部）」（昭和17年9月2日調製）で、ハワイ作戦の計画や経過概要並びに戦果が、行動図とともに収録されています。そして同「戦訓」では、ハワイ作戦は「好機ヲ捕捉シテ奇襲ニ成功」したが、「当時敵航空母艦出動シテ所在不明ナルト攻撃主目標ヲ戦艦ニ置キタル為航空母艦ヲ撃滅シ得ザリシハ遺憾ナリシモ戦艦撃沈四隻撃破四隻撃破炎上セン飛行機約五〇〇機ニ及ビ（中略）爾後ニ於ケル全般作戦指導ヲ容易ナラシムルヲ得タリ」と評しています。



**第1航空艦隊戦闘詳報**（登録番号：④戦訓詳報戦時日誌-11）

昭和17年6月、再び機動部隊を率いてミッドウェー作戦に参加した第1航空艦隊司令長官南雲中将は、空母4隻とその艦載機多数を失うという大損害を被ります。この史料は「第1航空艦隊戦闘詳報」（昭和17年5月27日～同年6月9日）で、ミッドウェー作戦の計画や経過概要並びに戦果が、行動図及び合戦図などとともに収録されています。そして同「戦闘詳報」の最後において、「本作戦ハ各部隊各艦ノ奮戦目覚シク敵ニ与ヘタル被害甚大ナルモノアリタレドモ我亦空母四隻ヲ失ヒ『ミッドウェー』攻略ニ頓挫ヲ来セリ」、近き将来生起すべき敵の反撃に警戒を要するとともに、本作戦の「戦訓ヲ生カシテ航空母艦将来ノ用法ニ資スル要切ナルモノアリ即チ索敵ノ強化 集合分散配備ニ対スル柔軟性並ニ敵発見ニ当リテハ急速ナル飛行機発進等之ナリ」と記しています。

《お知らせ》

史料保存のためのマイクロ撮影こともない、一時的に閲覧できない史料があります。

詳しくは、防研ウェブサイト「閲覧が一時不能となる史料」をご覧ください。

※ 記事に関する御意見、御質問等は下記へお寄せ下さい。なお、記事の無断転載・複製はお断りします。  
防衛研究所企画部企画調整課  
専用線：8-67-6522、6588（史料紹介コーナーのみ6668）  
外線：03-3713-5912  
FAX：03-3713-6149 ※ 防衛研究所ウェブサイト：<http://www.nids.go.jp>